

歌曲におけるピアノの役割について
——シューベルトの《美しき水車小屋の娘》D795の場合（その1）——

臼井 英男*

（1992年10月7日受理）

On the Role of Piano in Song :
in the Case of F. Schubert's "Die schöne Müllerin" D795 : Part 1

Hideo USUI

(Received October 7, 1992)

1. はじめに

歌曲における声と器楽の関係は、ハイドン（1732～1809）以降、声とピアノが主流となり、特にドイツではシューベルト（1797～1828）及びそれ以後の「リート(Lied)」、フランスではフォーレ（1845～1924）及びそれ以後の「メロディー（Mélodie）」において両者の関係はより緊密なものとなった。歌曲におけるピアノの役割が、声の旋律をなぞるか、単なる和音奏による旋律の支えでしかない、所謂「伴奏」のパターンは、歌曲の成長と共に姿を消していった。

歌曲におけるピアノは、声と共に共有する詩に対し、音楽的、文学的であるべきで、その表現の役割は多種多様である。声が、或いはピアノがリードする場合、両者が対話する場合（同時進行もあれば、交互の進行もある）等枚挙にいとまがない。又、ピアノの独立した役割としては、前奏、間奏及び後奏を受け持つ重要な任務がある。歌曲におけるピアノの役割は、決して脇役的なものではなく、声と同等、或いはそれ以上の場合もある。

この小論は、歌曲におけるピアノの役割を、シューベルトの連作歌曲《美しき水車小屋の娘》の中から例をあげて考察する。

シューベルトは、歌曲において取り扱う自然、取り分け小川、湖、海といった水に関するものを多く対象としている。今回取りあげる《美しき水車小屋の娘》は、当然のことながら、水車小屋の若者が徒弟修業のために、小川に沿って旅に出掛ける物語であるために、小川は共にあり、若者は小川に語りかけ、訴え、逆に慰められもする。

ピアノに関して言えば、小川の単なる情景描写にとどまらず、詩の内的表現にも大いに寄与し、詩の心の脈動はピアノ・パートにも満ちている。この連作歌曲集は、声とピアノのアンサンブルによって、ロマン的な20編の絵が必然的な連りを持って作曲されている。

*茨城大学教育学部音楽研究室（〒310 水戸市文京2丁目1-1）。

2. 《美しき水車小屋の娘》D795について

この連作歌曲集は、1823年5月から11月にかけて、途中オペラ《フィエラブラス(Fierabras)》の作曲や病による中断はあったが、書かれた。詞は、ミュラー(Wilhelm Müller1794~1827)の「放浪するヴァルトホルン吹き」の遺稿からの77編の詩集(77 Gedichte aus dem hinterlassenen Papieren eines reisenden Waldhornisten)によっているが、シューベルトは作曲するに当って、“プロローグ”と“エピローグ”及び第6番“水車小屋の生活(Das Mühlenleben)”，第16番“最初の苦しみ—最後の戯れ(Erster Schmerz—letzter Schmerz)”，第20番“忘れな草(Blümlein Vergißmeine)”を省き、20曲での構成としている。“プロローグ”と“エピローグ”を省いた理由は、そのプロローグもエピローグも本筋と何んら結びつかないものであるため、又3編の詩については、“水車小屋の生活”は作曲する程の価値がないため、他の2つの詩は後続の詩に対し、加えれば説明過多になるためと考えられる。

シューベルトがこの歌曲集を作曲するに当っての意図は、水車小屋の若者が修業のために旅に出、小川という自然の懐に抱かれて、美しい娘と出会い、経験する喜びと悲しみを可能な限り素朴に、飾りを付けずに表現することにある。シューベルトはそのためにも、2つの作曲形式を使い分け、有節形式による9曲(内、1曲は変形した有節形式)と通作形式による11曲の構成で物語を展開している。

声の音域及びピアノの音域について述べると、この歌曲集の原調の譜面を見れば、声の音域及び声種上の音質の点からテノールが最適であり、水車小屋の若者の性格・人物からもテノールが理にかなう。声の音域は、1オクターブ内がほとんどで、拡大しても9度~10度、最大拡大の12度は第11番の“狩人”1曲のみ、11度は第7番“焦燥”，第15番“ねたみと誇り”，第17番“いやな色”の3曲であるが、音域を拡大する高音の使用頻度は非常に少ない。このことは、前述のシューベルトの素材に、そして虚飾を避ける意図の一つの証左でもある。又ピアノの音域は、中央のハ音を中心に上下2オクターブが範囲であるが、2点音域の使用頻度は少なく、従って多くは3オクターブの範囲となっている。理由は、当時のピアノの高音が現在のピアノのように輝きを持った響きを出し得なかったためと思われる。シューベルトは、他の曲においても、3点音の使用は少なく、この歌曲集の4年後に書かれた連作歌曲集《冬の旅》の第15曲“からす”の3点音使用が際立つ程である。

3. 歌曲におけるピアノの役割

《美しき水車小屋の娘》中の12曲を例として

1) “さすらい”

作曲の形式は有節形式をとり、リズムもメロディーも民謡風で簡潔そのものである。年季奉公を終え、修業を目差して旅に出る水車小屋の若者の素朴ながらも、はちきれんばかりの心の高揚が「声」と「ピアノ」に満ち溢れている。

4小節より成る前奏は、単純明快に若者の浮き立つ想いを、そして水車の回る様を表わしている。ペーターズ版によれば、前奏最終小節内の8分音符にフェルマータが付され、第2，3，4節の間

奏及び第5節の後奏となるフレーズ最後の8分音符にもフェルマターが同様に付されている（譜例1）²⁾。一般に、前奏と後奏のフェルマターを生かし、間奏でのフェルマターを無視する解釈が通例と思われるが、ブライトコップフ版の旧全集によると、前奏が間奏、後奏を兼用する記譜で、前奏最後の小節の8分音符に同様にフェルマターの記号が付されており、なお且つ終止記号のフィネ(Fine)が記されている（譜例2）³⁾。これをどのように解釈すればよいか？フェルマターとフィネを分離し、前奏・間奏にフェルマターを生かすか、この2つの記号を終止記号として用いるかである。ジェラルド・ムーアは後者に正当性を認めている⁴⁾。確かに若者の歌う‘Das Wandern ist des Müllers Lust, das Wandern!（さすらいは水車屋の喜び、おお、さすらいよ！）’の勢いのある歌い出しの前にフェルマターがあるよりは、リズムカルな前奏によって歌い出す方が自然と思える。ただし、最新のベーレンライター版⁵⁾では「フィネ」の文字を付していない。

ピアノは、前奏、間奏、後奏共に同じ4小節の音楽を用いる訳であるが、16分音符の分散和音による音型は曲前半を通して続けられる。後半に入ったの4小節では、低音部にオクターブ音を連続させて変化を見せるが、その後は既出の音型に戻る。単純そのものであるが、5節から成る詩の全てを支えている。ピアノの記譜は、全て低音部譜表により、リズムは軽快ながら、水車の回る音は重い。

DIE SCHÖNE MÜLLERIN

Wilhelm Müller

DAS WANDERN¹⁾

Das Wandern ist des Müllers Lust,

Das Wandern!

Das muss ein schlechter Müller sein,

Dem niemals fiel das Wandern ein,

Das Wandern.

Vom Wasser haben wir's gelernt,

Vom Wasser!

Das hat nicht Rast bei Tag und Nacht,

Ist stets auf Wanderschaft bedacht,

Das Wasser.

Das sehn wir auch den Rädern ab,

Den Rädern!

Die gar nicht gerne stille stehn,

Die sich mein Tag nicht müde drehn,

Die Räder.

Die Steine selbst, so schwer sie sind,

Die Steine!

Die tanzen mit den muntern Reihn

Und wollen gar noch schneller sein,

Die Steine.

O Wandern, Wandern, meine Lust,

O Wandern!

Herr Meister und Frau Meisterin,

Laßt mich in Frieden weiter ziehn

Und wandern.

2) “どこへ？”

通作形式による。若者が旅に出て始めて出会った小川。とどまることを知らぬ小川の流れを、ピアノの右手による6連音符の分散和音(譜例3)⁶⁾で表現し、曲中転調による展開もあるが、この6連音符によるリズムは終始変わることなく続けられる。

詩第1節は、さわやかに流れる小川の情景を主調のト長調で、第2節は若者が誰れの指示に従って旅に出たのかと自問しながら小川を下る場面をイ短調で、第3節小川を下るにつれて、水の流れはよりすがすがしく、さざめくようになる様子をホ短調と二長調でというように第2節以降は転調がいかに自然に導入され、又第3、4、6節においては声のメロディーを、低音部において、ピアノの左手が効果的になぞる場面もあり、担担と進行しながらも彩色が、そこかしこに施されている。

WOHIN ?

Ich hört' ein Bächlein rauschen
Wohl aus dem Felsenquell,
Hinab zum Tale rauschen
So frisch und wunderhell.

Ich weiss nicht, wie mir wurde,
Nicht, wer den Rat mir gab,
Ich mußte auch hinunter
Mit meinem Wanderstab.

Hinunter und immer weiter,
Und immer dem Bach nach,
Und immer frischer rauschte
Und immer heller der Bach.

(以下3節省略)

3) “止まれ！”

通作形式。前曲の“どこへ？”のppによる小川のせせらぎの余韻が漂っている。そこえfのアルペッジョ。この前奏の導入には驚かされる。‘はんの木の間隠れに、私は水車小屋を見つけた。水のせせらぎと歌声に交じって水車のざわめきが聞こえる。(Eine Mühle seh'ich blinken aus den Erlen heraus, durch Rauschen und Singen bricht Rädergebraus.)’探し求めていた水車を見つけ興奮する若者。

前奏は11小節からなりfで始まるアルペッジョは、水車の回る音、第2小節最後の左手で奏されるアクセント付きの8分音符は、やっと巡り会えた若者の「おっ！」と感嘆する様を彷彿とさせ、弱拍にアクセントを付しての効果は十分にあり、劇的表現である(譜例4)⁷⁾。ペーターズ版による前奏第1小節のf,dim.,p,dim.,のディナミック(強弱法)の表示は、1小節内であるために緊張感を高め、この劇的表現に寄与しているが、ベーレンライター版ではこれ等2つのdim.は見当らない⁸⁾。

HALT!

Eine Mühle seh'ich blinken
Aus den Erlen heraus,
Durch Rauschen und Singen
Bricht Rädergebraus.

Ei willkommen, ei willkommen,
Süßer Mühlengesang!

Und das Haus, wie so traulich!

Und die Fenster, wie blank!

(以下1節省略)

前奏で用いられている水車の回転を模すアルペッジョは、曲中さまざまなディナーミクを伴って奏され、この節最後の若者が小川に述べる‘これが目的だったのか？(War es also gemeint)’では、pからppで奏される。この雰囲気はそのまま“小川への感謝”へ引き継がれる。

4) “小川への感謝”

通作形式。前曲の“生まれ！”の最後の詞‘War es also gemeint’が、再びこの曲の冒頭におかれ、両曲がより緊密な関係を保つ。同じ詞を用いても前曲の場合とでは意味合いが異なる。ここでは、心からの納得と安ど感に満ちている。

前奏は穏かに、ほのぼのとした幸福感を漂わせ、小川への感謝の気持ちに満ちた4小節。旋律線の上行、下行にこだわらず、絶えずピアノの弱奏による滑らかな流れであるために、第2小節のプラルトリラーの効果が絶妙である(譜例5)⁹⁾。

第1節は主調のト長調で書かれ、第1節最後の行‘War es also gemeint?’の終止は主音で解決されている。これは、若者が小川の意図を満足気にうなづく音楽的処理でもある。

しかし、第2節の‘水車小屋の娘のところへ！(Zur müllerin hin!)’では、声が高音へ5度の跳躍をし、若者がその娘に大いに関心があることを示す。第3節の‘娘がお前(小川)に使いをよこしたのか？或いはお前が私を誘ったか？私はそこが知りたい。(Hat sie dich geschickt ? Oder hast mich berückt ? Das möcht’ich noch wissen.)’では、短調に色合いを変え、若者が娘の気持ちをつかめずにいる不安を示している(譜例6)¹⁰⁾。

ピアノは、この曲中、前奏、後奏も含めて、全て低音部譜表上に記譜されており、ピアノの音色は、耳障りではなく、しっとりとした、落ち着いた雰囲気を醸し出している。声とピアノ上声部の旋律は美しい二重唱を構成し、聴く者に安らぎを覚えさせる。

DANKSAGUNG AN DEN BACH

War es also gemeint,
Mein rauschender Freund,
Dein Singen, dein Klingen,
War es also gemeint ?

Zur müllerin hin!
So lautet der Sinn.
Gelt, hab’ich’s verstanden ?
Zur Müllerin hin!

Hat sie dich geschickt ?
Oder hast mich berückt ?
Das möcht’ich noch wissen,
Ob sie dich geschickt.



(以下2節省略)

5) “仕事を終えて”

若者は、前曲の“小川への感謝”で水車屋の娘の存在を知り、小川がここえ導いてくれたことへの感謝を歌にした。この歌曲では、若者は‘思い切り振り回せる4本の腕があったなら！(Hätt'ich tausend Arme zu rühren!)’……あの美しい娘は、私の誠実な心分ってくれるだろうにと一べつもせぬ娘に、我が身の非力を嘆く。

前奏は、若者の挫折感と焦りを、イ短調のfによる和音と休符、特に第2小節の長めの休符に託し、第7小節からの16分音符による分散和音は、水車の回転を模すばかりではなく、若者の心を動的に表す（譜例7）¹¹⁾。

‘美しい水車小屋の娘は、私の誠実な心分ってくれるだろうに’はイ長調に転調して夢を、第2節‘ああ、私の腕は何ん弱いことか！(Ach, wie ist mein Arm schwach!)’は2つの8分音符と8分休符のリズムながら、弱音での重い和音奏で無念さを示す。水車小屋の親方の‘皆んなよくやった、ご苦勞。(Euer Werk hat mir getallen.)’はレチタティーヴォとし、付点2分音符の和音上で威厳をもって歌われるが、その後の詞‘そしてその娘は、皆におやすみと告げる。(Und das liebe Mädchen sagt allen eine gute Nacht.)’では、若者に一べつだもしない娘の態度に、sfを付した和音

の強奏を与え、若者の無念の気持を表している。若者は‘私に4本の腕があったなら！’と再び歌う際のピアノのリズムは、前出の  ではなく、 と重みをためるリズム型となり、無念さが倍加される（譜例8）¹²⁾。

この曲は、曲中にレチタティーヴォを置き、前半と後半の音楽には、筋の展開に応じて、リズムに変化を与えている。

AM FEIERABEND

Hätt'ich tausend
Arme zu rühren!
Könnt'ich brausend
Die Räder führen!
Könnt'ich wehen
Durch alle Haine!
Könnt'ich drehen
Alle Steine!
Daß die schöne Müllerin
Merkte meinen treuen Sinn!

Ach, wie ist mein Arm so schwach!
Was ich hebe, was ich trage,
Was ich schneide, was ich schlage,
Jeder Knappe tut mir's nach.
Und da sitz'ich in der großen Runde,
In der stillen, Kühlen Feierstunde,
Und der Meister spricht zu allen:
Euer Werk hat mir gefallen;
Und das liebe Mädchen sagt
Allen eine gute Nacht.

譜例 1

1.
Das Wandern.

Fr. Schubert, Op. 25.

Mäßig geschwind.

Singstimme. 1. Das

Pianoforte.

Wan - dern ist des Mü - lers Lust, das Wan - dern! Das
 2. Was - ser ha - ben wir's ge - lernt, vom Was - ser! Das
 3. schn wir auch den Ra - dern ab, den Ra - dern! Die
 4. Stei - ne selbst, so schwer sie sind, die Stei - ne! Sie
 5. Wan - dern, Wan - dern, mei - ne Lust, o Wan - dern! O

1. Wan - dern ist des Mü - lers Lust, das Wan - dern! Das
 2. Was - ser ha - ben wir's ge - lernt, vom Was - ser! Das
 3. schn wir auch den Ra - dern ab, den Ra - dern! Die
 4. Stei - ne selbst, so schwer sie sind, die Stei - ne! Sie
 5. Wan - dern, Wan - dern, mei - ne Lust, o Wan - dern! Herr

1. muß ein schlechter Mü - ler sein, dem nie - mals ful das Wan - dern ein, das
 2. hat nicht Rast bei Tag und Nacht, ist stets auf Wan - der - schaft be - dacht, das
 3. gar nicht ger - ne still - le stehn, die sich mein Tag nicht mu - de drehn, die
 4. tau - zen mit den mun - tern Reihn und wol - len gar noch schmel - ler sein, die
 5. Mei - ster und Frau Mei - ste - rin, laßt mich in Frie - den wei - ter - ziehn und

1. Wan - dern, das Wan - dern, das Wan - dern, das Wan - dern.
 2. Was - ser, das Was - ser, das Was - ser, das Was - ser.
 3. Ra - der, die Ra - der, die Ra - der, die Ra - der.
 4. Stei - ne, die Stei - ne, die Stei - ne, die Stei - ne.
 5. wan - dern, und wan - dern, und wan - dern, und wan - dern.

2. Vom
 3. Das
 4. Die
 5. O

譜例 2

I.
Das Wandern.

Mässig geschwind.

Singstimme. Das
Vom

Pianoforte. Fine

Wan - dern ist des Mü - lers Lust, das Wan - dern, das
 Was - ser ha - ben wir's ge - lernt, vom Was - ser, vom

Wan - dern ist des Mü - lers Lust, das Wan - dern, das
 Was - ser ha - ben wir's ge - lernt, vom Was - ser, vom

muß ein schlechter Mü - ler sein, dem nie - mals ful das Wan - dern ein, das
 hat nicht Rast bei Tag und Nacht, ist stets auf Wan - der - schaft be - dacht, das

Wan - dern, das Wan - dern, das Wan - dern, das Wan - dern.
 Was - ser, das Was - ser, das Was - ser, das Was - ser.

譜例 3

2.
Wohin?

Mäßig

ich hort' ein Hach - lein

rau - schen wobl aus dem Fel - sen - quell, hin - ab zum Ta - lo

譜例 4

3.
Halt!

Nicht zu geschwind.

Kleine Müh' - lo seh' ich bin - ken aus den Er - len her aus, durch

譜例 5

4.
Danksagung an den Bach.

Etwas langsam.

War es
al - so gemeint, mein rauschender Freund? dein Sin - gen, dein Klän - gen, war es al - so ge -
meint, war es al - so ge - meint? Zur Mül - le - rin hint' so lau - tet der Sino.

譜例 6

Hat sie dich geschickt? o - der hast mich berückt? das möcht ich noch wissen, ob

譜例 7

5.
Am Feierabend.

Ziemlich geschwind.

Halt ich lau - send Ar - me zu
rüb - ren! könnt ich brau - send die Bä - der füb - ren! könnt ich wa - ren, durch al - le
Häl - nol könnt ich dra - hen al - le Stel - len! daß die scho - ne

譜例 8

stille, kühle Pul - ver - stau - de, und der Meister spricht zu al - len: eu - er
Werk hat mir ge - fal - len, eu - er Werk hat mir ge - fal - len; und das lie - be Mad - chen
sagt - al - len ei - ne gu - te Nacht, al - len ei - ne gu - te
Etwas geschwinder.
Nacht. Halt ich lau - send Ar - me zu

注

- 1) ミューラーの詩集では“Wanderschaft”.
- 2) Franz Schubert, *Lieder Band 1* (Leipzig : Edition Peters), pp. 4-5.
- 3) Franz Schubert, *Lieder V11* (Leipzig : Breitkopf & Härtel), pp. 2-3.
- 4) G.ムーア (竹内ふみ子訳) 『シューベルト三大歌曲集』(シンフォニア, 1983), p.28.
- 5) Franz Schubert, *Heft 1 Die schöne Müllerin* (Kassel, Basel, Tours, London : Bärenreiter— Verlag, G. Henle Verlag), p.7.
- 6) Franz Schubert, *Lieder Band 1, op. cit.*, p.6.
- 7) *Ibid.*, p.10.
- 8) Franz Schubert, *Heft 1 Die schöne Müllerin op. cit.*, p.15.
- 9) Franz Schubert, *Lieder Band 1, op. cit.*, p.13.
- 10) *Ibid.*, p.14.
- 11) *Ibid.*, pp.15-16.